いきいき

子どもたちが育つために学校と地域ができること

みんなで一緒に考えよう！

と　き：平成27年1月23日（金）
14：30～17：00

ところ：長野市ふれあい福祉センター

内　容：・分科会 14：30～16：00
・まとめの全体会 16：00～17：00
・活動展示 14：30～17：00

主催：長野市社会福祉協議会
後援：長野県北信教育事務所・長野市教育委員会・長野市ＰＴＡ連合会

分科会①　「先生がコーディネーター　気軽にやってみよう“子どもボランティア”」
分科会②　「地域が支える学校のカタチ」
分科会③　「人を幸せにする技術ってどんなもの？～豊かに生きるために～」
分科会④　「子どもたちの貧困を考える」
分科会⑤　「何がしたい？体験学習」

平成26年度「福祉共育のつどい」は、学校と地域が子ども達を中心に学び合う場をつくろうと開催しました。

今年度から長野市ボランティアセンターでは、従来の「福祉教育」を「福祉共育」と変え、より多様な人たちが地域をベースに学び合うことを目指してきました。

分科会を５つ企画し、地域で起きていること、学校で起きていること、多様な人たちの課題解決を一緒に考える場となりました。それぞれの分科会でどんな話し合いがなされたのか、ご紹介します。

分科会①
「先生がコーディネーター
気軽にやってみよう“子どもボランティア”」

★ファシリテーター：田中優美子さん
★シンポジスト：
・末廣真弓さん（三本柳小学校教諭）
・宮澤由枝さん（若槻地区住民自治協議会地域福祉ワーカー）
・島田和政さん（綿内小学校教諭）
・三ツ木辰己さん（市教育委員会生涯学習課）
・阿部栄智さん（長野商業高校教諭）

この日、田中優美子さんから先生方に投げかけたお題は、「地域と学校が関わって子どもたちがボランティアすると、何が育つんだろう？」だった。

たとえば、高校生。ボランティアを経験した子たちは自分に自信があるし、動きも良い。ボランティアすることでガラッと変わる子ども達。何がそうさせるのか？

◆出会う！変わる！

異分野の人たちとの出会いから、大人の社会へと世界が広がっていく。大人たちの姿から自分が今「勉強する意味」がわかってくる。そこから「もっといろんな人と関わりたい」と変遷していく。（阿部）

長野ろう学校の生徒会レモンデイズは、いろいろな学校へ行って出前授業（交流）をする。行った先の子ども達がどんどん変わっていく。最初は「かわいそうな人が来る」と思っているが、実際に交流すると一人の人間として同じと感じてくれる。あくまで生徒が中心になって進めることが大切で、それによって生徒達もどんどん変わる。（長野ろう学校保坂先生）

最初は先生が投げかけてもいい。生徒達から動きだすと変化が。忙しい学校生活の中でも、誰かのためと動きながらそこに楽しさを見出していく。「自分たちにできることがある」という自信が。（三ツ木）

◆子どもが地域の宝⇔地域の人は学校の宝

地域の人は「私なんかでいいの？」と必ず言うが、いろいろな思いを持って生きている。そこから学ぶことはとても多い。（末廣）

中学生が地域の会議に出たことがあるが、これはすごいこと。教師が想像もしていなかった展開が起きてくる。都会へのあこがれが強い時期に、地域を知ることは大切。子どもたちの生活の場は地域であり、住民自治協議会の会報などで地域での子どもたちの様子を見て、学校とは違う一面を発見する。（三ツ木）

◆先生自身も学ぶ

先生自身がボランティアすると良い連鎖が起きる。子ども達と一緒に活動することは楽しい。忙しい中でも、人とのかかわりから「自分の幸せ」を感じることができ、それが生きがいになっていく。今まで知らなかった世界を知ることは本当に楽しい！（末廣）

◆保護者を味方に！

地域と言うとわかりにくいが、保護者も地域の人と考えるとその力を借りることも大切。「やってください」ではなく「一緒にやりませんか？」。

保護者もやりたい気持ちを持っているはずだし、感謝されたり褒められたりすることはうれしい。先生が中間的な役割を果たすとうまくいく。

そんな中、地域に出ると子どもたちは自分の考えを「自分の言葉」で言えるようになり、自信をつけていく。自分の言葉を持つと先生の話を聞けるようになる。その姿を見て保護者が変わっていく。（島田・保護者代表田中喜美子）

◆地域も求めている

地域の人からは、「学校という箱の中で何が起きているのか？　わからない」と言われる。でも、学校で講座を開いたら、たくさんの人が来てくれた。（阿部）

地区の行事に子どもたちが来てくれると、役員の意識が変わっていく＝新しい風が吹く。地域の困りごとで学校にSOS！をした。助っ人に来てくれて本当に助かった、うれしかった。そうやって関係ができると、部活動などでの活躍を目にしたとき、他人事ではなくうれしくなる。地域から見ると、お願いしていいのかどうかがわからなくて発信も難しい。だからこそ、何もない時から関係作りをしていきたい。（宮澤）

◆共に

学校ではできない学びがあって、それは地域=社会に出ていろんな人と関わること。普段の学習や部活で学校の外に出ることはあるが、集団として閉じられている。（阿部）

でも、子どもたちを課題の核心に迫った場所に立たせると、自分のこととして捉えられるようになり、変化し、動き出す。そして、本気で学びたくなっていく。先生はその場所へ誘い、一緒にその場に立ち、同じ願いをもつ。そうするとそれぞれの中で見え方が変わってくるはず。子どもたちの変化をどんどん発信していこう！（三ツ木）

分科会②
「地域が支える学校のカタチ」

★ファシリテーター　戸田千登美さん
（長野県長寿社会開発センター）

◆信州型コミュニティスクールとは？

北信教育事務所　後藤卓巳さん

県は地域・学校の連携の在り方について信州型コミュニティスクールという名称で施策の方をすすめている。平成8年から文科省では「開かれた学校」という言葉を使ってきた。その当時いじめ等の問題が大きくクローズアップされていて、学校だけでは対処できないさまざまな問題がある、地域の協力が必要だというような趣旨だった。その後、学校教育に関する法改正も行われ、平成23年からは、文科省がコミュニティスクールを提唱。長野県では信州型コミュニティスクールとして、国のコミュニティスクールの良い所を活用している。

これまでは学校は学校、地域は地域というように分けられていた。学校教育、社会教育共に進めていかなければならない方向に学校はきている。地域の人から意見をもらうだけでなく、学校現場に地域の人たちの力を求めていきたい。大人も子どもも一緒に学び成長していく、地域の人も学校の先生も子どもを間に話すことで、学び合うことができる。学校の先生は次々変わっていくが、地域の人はずっとそこにいる。思いはしっかり受け継がれる。

また、全国的な事例から見ても、地域との連携が進んでいくと先生方の負担感は減少していくことがわかっている。一方地域はコミュニティの活性化や高齢者のいきがいづくりや活動人口を増やすことができる。双方向の動きをスムーズにする「場」を設定することから始めてもらえば良いと思う。

◆ボランティアの立場で

東北中学校０学年三葉組（西澤和雄さん）

3年前に０学年三つ葉組を立ち上げた。現在生徒（会員を生徒と呼ぶ）は50人くらい。０学年というのは、卒業がないという意味で、すなわち継続を意味する。

子ども達の成長を考えた時、大人が学校に関わることが大切だと始まった。資源回収では一緒に汗をかき、給食を一緒に食べながらおしゃべりする。子どもたちは、普段先生や親には話さないようなことでも、地域の大人には話してくれる。三つ葉組は、キャリア教育でも活躍している。大学生が行く企業説明会のように、大人達がブースを出し、仕事の内容や会社のことを説明する場を学校と一緒に作っている。

子ども達は先生や家庭では反発するようだが、私たち地域の大人の話はよく聞いてくれる。

長沼小学校（学校支援コーディネーター　西澤和雄さん）

長沼小学校は信州型コミュニティスクールをスタートしている。私はそこで学校支援ボランティアのコーディネーターをやっている。学校と地域をつなぐネットワーク「りんごっこ」を立ち上げ、読み聞かせやパトロール、料理、俳句、歴史研究などの活動をしている人たちが、学校での活動を展開している。

本田秀子さん（南部小学校学校支援ボランティア）

南部小での活動を30年くらい続けている。南部小は地域の人にとっては思いある場。児童数が減少しているが、敷地は広く、その環境整備は大変。ボランティアがその一役を担っている。今は父兄自ら学校支援ボランティアとして授業の時間にもサポーターとして活躍している。個人的には障がい児の登校支援など、もっとできることがあるのではないのかとも思っている。

南部小学校の近くのおばあちゃんが、回覧板でボランティア募集を見て、「学校へ行くことはできないが、家でできること」として、自宅の前に椅子を出して下校時の見守りをしてくれている。学校が広報することの意味は大きい。地域の人たちの気持ちを作っていく。

◆学校から

松代小学校(松下寿先生)

コミュニティスクールは、子どもたちと学校のニーズを地域の力(人材・活動)といかに結び付けていくかがポイント。松代にはたくさんのボランティア・地域活動をする人たちが200人以上いて、クラブ活動でも活躍していただいている。その人たちと「松代っこを育む会」を立ち上げ、信州型コミュニティスクールをスタートした。互いに「WinWin」の関係がないと続かないと思っている。

更府小学校(岡村公一先生)

更府小学校は全校児童15人の小さな学校。今年、更府っこ応援団を設立した。学校の環境面では、信更地区の住民自治協議会のボランティア委員会にお願いしてプール清掃などやってもらっている。今年度は読み聞かせのボランティアも立ち上がり、書写指導を公民館の講師にお願いしている。その方は、「書」を伝えたいという思いがあり、その場が学校で持てたと思う。

また、学校が何をやっているのかをしっかり地域に広報しようと学校のホームページに応援団のことを載せたり、地区の回覧にも入れさせてもらっている。

人口2,400人、高齢化率45%、たくさんの方に来てもらうことは難しいが、少しずつ地区に浸透している実感がある。

山川とし子さん(古里小学校　図書館司書)

図書館は地域とつながっている。読み聞かせの方々も子ども達を支えているが、地域と学校の間をつなぐ人が求められている。信州型コミュニティスクールは大切だとわかっているが、継続を考えたら学校と地域にいる熱意がある人だけに任せていていいのか？　一部の人にしかできないのか？　関心のない人たちに関わってもらうのにはどうしていったらいいのか？　継続のためのお金の問題など疑問を感じている。

◆住民自治協議会から

内田光一郎さん(大岡地区住民自治協議会)

大岡は山間地で人口は減少、高齢化している。地域が学校を支えることが難しくなって、学校も成り立たなくなってしまう可能性が高い。学校から信州型コミュニティスクールを一緒にやりたいと要望が来ているが、そんな現状の中でどうしていったらいいのかと今日来た。

地域の人たちにコミュニティスクールのことを伝えるのもとても難しい。でも、地域づくりのためのツールだと考えたらいいのかもしれないと思っている。地

域のことを考えるときに学校を中心に考えていくという視点でこれから進めていきたい。

宮下弥子さん（七二会住民自治協議会　地域福祉ワーカー）
　コミュニティスクールの話は七二会でも出ました。でも「なんだそりゃ」で終わっている。実際には学校での農作物のお世話を手伝っている人もいるし、高齢者のふれあい会食に子ども達に来てもらったら、高齢者だけでなく、子ども達から評判がよかった。子どもたちがあんなに高齢者に関心を持ってくれていることが驚きだった。学校からも熱いオファーが来ていて、来年度に向けてどうやっていったらいいのか考えている。

◆地域の活動者として

川中島の保健室白澤章子
　元養護教諭で、退職後川中島地区で自宅でまちの保健室をやっている。子どもについて悩みを抱えている親が相談に来る。もともと学校の保健室も悩みをちょっと話せる場だった。でも、学校で保健室に通っていた課題を抱えた子ども達が卒業と同時に行き場がなくなってしまう。そこで、地域でもと活動を始めた。
親御さんの話を聞いていると、学校の先生との信頼関係が上手くいっていない例もある。両方の立場を知っているからこそできることもあると思っている。親が求めているものがなんなのか、学校とうまくいかない理由はなんなのか？をしっかりと聞いていくことが大切。

　多様な関係作り、多様な支え方が見えてきたところで、「地域と共にある学校のため、私ができること、学校ができること」を出し合ってみた。
そこから見えたのは・・・？

「双方向」
- **地域が支える学校、学校を核にした地域づくり、双方の視点からコミュニティスクールを考える**

「場づくり」
- **地域と学校が互いを知ること、知り合える場を作ること**

「コーディネート」
- **すでに地域にある活動や拠点と学校が連携する**
- **地域と学校をつなぐコーディネーターの存在が必須**

分科会③
「人を幸せにする技術ってどんなもの？」
～豊かに生きるために～

★ファシリテーター：長坂平和さん
★シンポジスト：
- Ｓさん（関節系障がい当事者）
- 藤澤義範さん（長野高専准教授）
- 平林三平さん（長野アイデア研究会）
- 塚田玲子さん（宅老所やまや）

　まず始めに、自己紹介を兼ねて参加者全員から「あったらいいな　こんなモノ」を聞きました。緊張を解くもの、ちゃんと起きられる目覚まし、着ると誰とでもうまくしゃべれる上着など、欲しいモノは人それぞれ。学生からは「宿題を終わらせる機械」なんて発言も。

　そんな身近な「困りごと」やちょっとした「つぶやき」「気づき」に、どう向き合っているのか、パネリストの皆さんから思いをお聞きしていきます。

Ｓさん（関節系障がい当事者）
　子どもの頃から進行性の関節障がいで、年々できないことが増えてきている。今欲しいのは、力が無くても留められる髪のクリップ。握力が弱いので、市販の髪留めは使えない。でもただバネをゆるめると、今度は髪から落ちてしまう。
　デザインも大切。可愛いくて、自分で使えるものが欲しい。実用性だけでなく、生活していくうえで「楽しい気持ちになる」もの、というのも大切。
　この冬は、平林さんが軽い力で使える雪かき道具を持ってきてくれたり、他の困りごとにもアイデアをくれた。困っていることを「自分だけに留めないで発信」することで、「出会い」があるし、それが「すごく幸せで魅力的」。

平林三平さん（長野アイデア研究会）
　雪の日に新聞を取りに行くとき、ポストまで一人分の道だけ楽にかけるよう、ラッセル型の雪かき道具を発明した。自分のためのモノだった。
　それがＳさんと出会って、アイデアで「喜んでもらえる幸せ」を実感し、自分がやっていることをもっと人のために生かせるのではないかと思うようになった。不便だなと思っていることをそのままにせず、困りごとやアイデアの情報交換できる場を作っていきたい。

藤澤義範さん（長野高専准教授）

他県の高専で、隣に特別支援学校がある学校や、自分の子どもに障がいがあり補助グッズを作っている先生がいた。情報交換する中で全国プロジェクトが立ち上がり、高専の技術で「人の役に立つもの」を目指している。「あったらいいな」というものは全部実現したい。「不可能は無い」と思いたい。

学生にも、「現場を知らない」独りよがりな技術はダメと伝えている。便利なモノが、人を幸せにするとは限らない。困っている人との「コミュニケーション」を大事にし、使う「人」を考えないと。そして「作る人も幸せに」なりたい。

塚田玲子さん（宅老所やまや）

デイサービスを運営する中で大事にしているのは、やまやに来る方の「活躍の場」を作りたいということ。「できなくなった」という負い目や悲しさではなく、「まだまだ頑張れる！」という「生きがい」を感じられるよう、料理など多くのことに一緒に取り組み「活躍」してもらっている。

モノというハード面も大事だけれど、モノがなくても幸せになれる。「一緒にいる時間を楽しみたい」。

長坂平和さん（ファシリテーター）

「技術」＝「モノ」だと思っていたが、皆さんのお話を聴いていると、困りごとを一緒に考える「しくみ」、「人をやる気にさせること」、これも技術だと思った。

自分も高齢者施設で働いていて、手が少し不自由な利用者さんによかれと思ってスプーンをすすめたとき、「俺は箸で食べたい！」と言われ、その人にとっての「幸せ」とは何なのか、考えさせられた。今日のシンポジウムからは、こんなことが見えたのでは。

「共に考える」

どんな困りごとがあり、どうすることで、その人が「幸せ」になれるのか。そして「つぶやき」をかたちにすることで、困っている人を理解し、幸せに暮らす社会を「共に考える」コミュニケーションやプロセスこそが大事。

「モノの先にあるもの」

技術を「生かす」ことができなければ、「幸せ」にはつながらない。モノがあっても、使う「人」しだい。技術を使う人の「心」の持ちようも大事。そしてモノの先にある、「出会い」や「一緒の時間」を大切にしたい。

分科会④
「子どもたちの貧困を考える」

ファシリテーター：吉澤小枝さん
（ボランティアセンター運営委員）

発言者：
・宮崎ようこさん・新津みさ子さん（反貧困ネット）
・小林琴恵さん（長野市社協地域福祉課係長）
・戸谷雅史さん（まいさぽ長野）　他

現代日本、この飽食の時代にあって、今日食べるものもないような子どもがいるという現実を知っている人はどれくらいいるだろうか。今、６人に１人の子どもが貧困状況にあると言われている。

①現場で貧困世帯・子どもと関わっている人たちが把握している現状

■長野市社協地域福祉課係長　小林琴恵さん

生活あんしん・日常生活自立支援事業を担当している。利用者家族の中には親が精神疾患・多重債務・自己破産などで金銭的自立ができないケースが多い。その子ども達は影響をダイレクトに受けていて、不登校や食事がとれない、場合によっては親が不在など危機的状況。子ども本人からの相談は入ってくることはなく、親と出会って初めてわかる。

人が生きていくうえで、やっぱり「お金」は大切。使い方を知らない親と一緒に暮らしている子どもはそのまま大人になって、他の問題もあるが、やはり金銭管理がうまくできず、貧困は連鎖していく。

■反貧困ネット　宮崎ようこさん・新津みさ子さん

なんらかの事情で勉強をする場がない子どもたちのための「きずな塾」を運営している。勉強だけでなく、居場所としても考えている。毎回20人以上参加していて、そのうち３～４人は自力で来られず送迎している。

ここに来られない子がたくさんいるんだろうと思うが、その子たちと出会いたい。塾の存在自体知られていないと思うので、学校とつながりたい。行政にもはたらきかけている。

塾に来ている子たちの中にもごはんを食べていない子がいる。小学校２年生と１年生の兄弟が来ているが、３歳の子のおむつを替えている姿は、普段からやっているような手慣れた様子。また、生活保護世帯の小学校５年生、すごくしっかりしている。母が精神障がいで、高校生の姉が母親代わりで、この子もしっかりしている。子どもらしい生活ができていないと感じる。

学校から

学校でも子どもたちの信号はキャッチしている。ご飯を食べていない、給食費・修学旅行費が払えない、家以外の場所を転々としている子、ネグレクトと思われる子・・・。先生も親と接点を持てずにいる。ただ、どこまで踏み込んでいいのかがわからない。

■まいさぽ長野　戸谷さん

定時制の高校の先生から、ボランテイアセンターに就職の面接に着るスーツがないと相談が入ったことがきっかけで、まいさぽにつながった高校３年生の男の子。父は無職で生活スキル、コミュニケーションスキルに乏しい。彼は４月から就職が決まったが、新生活を始めるための物品がない、社会生活に慣れるため、実習や体験などが必要。ボランティアセンターと一緒にやっている。

②課題

・見えない対象者

・支援のしくみがない

■三帰寮(児童養護施設)　西澤施設長

施設に来る子はまだいい。そこに上がってこない子たちが心配。

今、子どもの自立支援は最高20歳までとなっている。それまでに生きる力・生活能力を付けてあげなければ。でも、実はそこで終わりではない、支援は20代、30代と続いていくことを見据えてしなければいけない。

虐待通報が義務化され、相談件数は増えている。とにかく、まず通報・相談してもらいたい。

③どうしたらいいのか？

・食の確保と心をゆるせる居場所の確保

■長野県ＮＰＯセンター　山田千代子代表理事

この日本で「食べられない子」がいることに驚いている。ＮＰＯセンターは、企業や関連団体などと一緒にフードバンクの立ち上げを模索している。実は全国的に見て長野県は遅い！　なぜこんなに深刻な貧困の現状が見えてこないのか？　とにかく多くの人に知ってもらわなければ。

いろいろな人と出会い、ふれあい、一般の家庭でならあたりまえのことができる場が必要。

・学習支援

■こども白書での調査から　小林啓子さん

学力の格差は、親の貧困から起きてくることが多い。長野県の生活保護世帯の子ども達の平成25年の高校進学率は64.5%、26年度は57%と低下してきている。全体は92%。児童養護施設の子ども達は高校進学する子がほとんど、ただその先大学・専門学校になるとぐっと下がってしまうが・・・。

また、障がいと貧困が重なり合っているケースも多い。特別支援学校の高等部に行く子が増えているが、実際に彼らは中卒になってしまうという事実。その後の就職や進学を考えた時にも厳しい現実が待っている。それだけに学習支援は本当に大切。格差はどんどん広がっていく。

・アウトリーチ

待っていても来ないＳＯＳ、それならアウトリーチしていくべき。学校の中に就学援助(学用品・ＰＴＡ会費・給食費・校外活動費などの補助)を受けている世帯は14%いるということも知られていない。その家庭に対して自治体は支援を義務付けられている。

行政だけでやるのではなく、ＮＰＯやボランティア・地域も一緒に支援を。でも、そこには個人情報保護の問題が。それなら、すべての学校で相談窓口やきずな塾などの情報をプリントで配るのも良いのでは？　自分から発信しやすくすることも大切。

・学校が仲介役に

国はスクールソーシャルワーカーを10,000人まで増やすと言っている。県も現在８人、来年度は４倍の予算をとっている。学校は子どもたちの様子が見えやすい場所。外に助けを求めてもらいたい。また、児童館などでも子どもの様子からＳＯＳはキャッチできるはず、先生ではない人が仲介するのも良いのでは？

・情報の共有と発信

支援している人たちが繋がっていない、情報が共有できていないことは課題。そのためにネットワークが必要なのでは？　こういう場が今後も続けられれば。

分科会⑤
「何がしたい？　体験学習」

ファシリテーター　湯田美明（長野県社会福祉協議会）

集まったのは、視覚障がい者のための音訳・点訳ボランティア、外出支援ボランティア。盲ろう者の通訳、ブラインドサッカー講師、車いすでの生活について講演している方、障がい者支援の施設職員など。

◆学校に行く中での課題

①学校の「時間がない」「先生が忙しい」ことに起因して、体験学習の時間が十分に取れず、丁寧な振り返りの時間をとれないこと。

②先生方の意識が「障がい者は困っている人、助けてあげるべき人」という場合がほとんどということ。時間がないと、先生が求める予定調和に終わり、子ども達の中にこちらが望んでいるような結果が残って行かない。アイマスク歩行をしても、結局のところ「こわい」という事だけが残り、「助けてあげなければいけない人」という意識が子どもたちの中に残ってしまう。

③また、学校の課題として、１人の熱心な先生がいなくなるとその取り組み自体が無くなってしまうことが多いこと。ちゃんと引き継いでほしいのに、先生は個人事業主のような感じで、記録を残してくれない。

◆課題に対してどうしていくのか？

・自ら選び取ることが大切

当事者として、講師として、「体験だけでなくて、ぜひ当事者と出会ってほしい。その生活の中での工夫や、私たちと変わらない」ということを知ってほしい。

一方、伝えたいことはたくさんあるけれど、それを前面に出してしまうことは体験によって得られる学びを限定してしまう可能性も指摘され、あえて何も伝えず、楽しい体験をしてもらう方がいいという意見もあった。

「体験」ではなく「体感」してもらう。ブラインドサッカーチームＦＣレインボーでは、「スポ育」というプログラムをここ数年実施していて、「子どもたちに考えさせる」ことを重視している。しかし、先生方は考えさせている場面で、答えを持って入ってしまう。体験から何を選び取るかは子ども達自身であって講師でも先生でもない。先回りは良くない。

・先生との関わり方を考える

先生方の意識も特別「排除しよう」としているのではなく、「どうしていいかわからない、どう接していいかわからない」という「知らない」ことから発している。先生自身が体験したことがないことも多く、事前の打ち合わせなど丁寧に接していくことが求められる。

以前高校教員をしていた成竹精一さんは、10年前に脊椎損傷で車いす生活をしている。自分が教員時代に「社会福祉」の授業を担当していたことがあり、生徒たちに体験学習もさせた。今思うと「なんて薄っぺらなことをさせていたのか」と愕然とすると語った。

１人の先生に伝えたから、すべて伝わるわけではない。だから懲りずに伝え続けて行かないとだめだ。上田市社協では、校長会で「ブラインドミーティング」というのを取り入れている。校長先生たちの間にその意味が根付いていくと学校全体での取り組みが定着していくかもしれない。

・コーディネートする人の必要性

さらに、現役の先生方から話を聞くと、「地域や当事者にパイプがない」と言う。そこをつなぐ人が必要。地域には障がい者がもっとたくさんいるはず、その人たちにもっと活躍してもらいたい。地域の障がい者が行けば、何度も行くうち子どもたちと関係ができ、まちで出会っても自然に接することができるようになるはず。「障がい者」として出会うより、「地域の人・・・たまたま障がいがある人」として出会いたい。

伝えたいことはちゃんと持ったうえで、押し付けではなく体験から得られるものも大切にする。当事者との関係を築くように提案しながら、コーディネートする人も、講師も先生と丁寧な関係作りをしていくことが必要。